

宗岡二中だより 3月号



令和7年3月3日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

自利利他円満

～ じりりたえんまん ～

校長 伊藤大輔

春は卒業、そして新たな始まりの季節。何かと変化が生じる季節です。自分は今から何がしたいのか。どう進んでいくべきか。思い悩む季節です。宗岡二中の一年も、もうすぐ終わります。四月の始業式・入学式で私は本校が目指す学校像を提示しました。なぜ「自利を以て利他を為す」としたのか、その意味は何かを伝えました。当時伝えた内容の一部を文字に起こしてみます。

みなさんは「自分」という存在がいよいよ大きくはっきりしてくる時期を生きています。人と自分との違いに気付き、思い悩む時期を生きています。そこで、「わたしは大切」といつも言い聞かせてほしいのです。「わたしは大切」だから、食欲に学んで、力を付ける。「わたしは大切」だから、挑戦をいとわず、心と体を鍛える。そして「わたしは大切」だから、人を敬い、人にやさしく寄り添う。人は人によって人になります。人とのつながりなくして人にはなれません。人に頼らないことには自立など果たせません。本当の自立とは、必要な時に人に頼れる人、そして自分が得意とすることで人に貢献する人にこそ訪れると私は思います。

今、私はみなさん一人一人の中に、そしてみなさんの間に「自利利他(じりりた)」の広がりを実感しています。授業はもとより、行事においても、日々の活動においても「疲れたけど楽しかった。」「大変だったけどやって良かった。」「苦労したけど満足した。」といった反応を直接にも間接にも目にしたり、耳にしたりすることが増えたからです。みなさんからの、こうした反応こそ、自分がよりよく育ったことの証(あかし)だと私は捉えています。ありがたいことです。

二千五百年前、インドに現れ、仏教を説かれたお釈迦さまは、「幸せになりたければ、『自利利他』

の道を行きなさい」と説かれました。自利利他とは、「相手を幸せにすることで(利他)、自分が幸せになれる(自利)」ということです。この反対が「我利我利(がりがり)」です。相手の幸せを思いやった言葉や行動は、必ず私自身に幸せを運んできてくれる、ということです。同じ世界で暮らしていても、一方で自分のことだけを考えているために、周囲と争って苦しんでいる人がいます。その一方で、お互いを助け合い、楽しく過ごしている人もいます。オレがオレがの「が(我)」を捨てて、おかげおかげの「げ(下)」で暮らせ、と言われます。感謝が幸せを呼ぶのです。

この「自利利他」に軸足を置き、今日まで続く発展を遂げたのが、てんびん棒を担いで全国を行商に歩いた近江(現在の滋賀県)出身の商人たちです。近江商人ゆかりの企業の一つ「高島屋」の二代目は、「お客様に得をしてもらいまが、自分たちの利益になるように心がけています。いわゆる『自利利他』は、昔から変わらぬ当店の家風であります」と語っています。「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」も自利利他に由来する近江商人の信条です。これは、売り手の都合ばかりを優先する(売り手よし)のではなく、買い手が満足し(買い手よし)、商いを通じて地域の発展や福利にも貢献する(世間よし)という考えです。「三方よし」を守り、正直な商売を心がけた結果、彼らは遠隔地の行商先で信用を集め、大きな成功を収めていくのです。

さて、みなさんには利他を為すに足る自利を、この先も追究してもらいたい。自分を丁寧に扱うことが、みんなの幸せを呼び、みんなに手を差し伸べることが、自分の幸せを呼ぶ。この幸せの循環を心に留め置き、卒業後も、進級後もそれぞれの場で最善を尽くされることを切に願っています。